



# 名著『イングランドにおけるガーデニングの歴史』を読む 第3回

## A History of Gardening in England



竹歳 誠

公益財団法人 都市緑化機構 評議員

### 第7章 エリザベスとジェームズ1世時代のキッチンガーデニング [1558～1625年]

「料理用菜園」cooks-garden がどのように変化していったかは、「楽しい花の庭園」ようには記録に残されてはいない。フラワーガーデンが館のすべての主な部屋からよく見えるようになっていたのとは対照的に、ハーブの庭はキャベツとかタマネギからはいろいろな種類の匂いが立ち上るため、館の横側に配置された。初期の頃の庭園では、ハーブは平均的な庭園のほぼ全体を覆い尽くしており、またノボロギク groundsel がネギ、タイム、レタスとともに居場所を与えられ、ツルニチニチソウ、バラ、スミレと一緒に差別されることなく庭園のハーブの仲間として認められていた

野菜はエドワード1世の時代 [在位 1272～1307年] にはこの国に溢れ返り、その後、無視されるようにもなった。しかしこの時代になると野菜の生産は飛躍的に増加し、貧しい一般庶民の間で再び利用されるようになっただけでなく、貴族階級などの高級な料理として使われた。その野菜とはメロン、pompions [メロン、カボチャ、ヒョウタンなど]、ヒョウタンの仲間 gourds、キュウリ、ダイコン、ムカゴニンジン、パースニップ、ニンジン、キャベツ、カブおよびあらゆる種類のサラダ用ハーブのことである。

この時期にガーデニングが進歩した証拠として、ロンドン市内、周辺で技能者の重要性が高まり、ジェームズ1世の時に [在位 1603～25年] 王室勅許により設立されたシティ・オブ・ロンドン同業組合 a Company of the City of London という権威ある地位を獲得した。このようなギルドの設立により、「自分たちの顧客を騙し失うことにつながる」枯れた木や悪い種を売りつける庭師による詐欺行為にストップがか



図1 庭師組合の勅許状

かることが期待された。

これまで栽培されてきたすべてのハーブが今も変わらず育てられているのは、多種多様な薬用効果があるためであった。すべての庭園で10世紀以降育てられてきた植物としては、マンドレーク Mandrake (*Mandragora vernalis and autumnalis*) が挙げられる。この植物の根っことは人間の形に似ていて、何か不思議な力を持っていると考えられたり、大地から引き抜かれる時に金切り声を上げ、その音があまりにも恐ろしかったため、それを聞いた者は気が狂うか、死んでしまうと言われた。

キッチンガーデンに持ち込まれた最も重要なものはジャガ

イモ potato であった。一般的には、ジャガイモはウォルター・ローリーにより最初にバージニアからヨーロッパにもたらされたと言われるが、その前に 1580 年から 1585 年の間にスペイン人によってもヨーロッパに持ち込まれていた。サツマイモはコロンブスがイサベル女王に持ち帰ったとされ、16 世紀初めにはスペインで栽培されていた。

より大きな関心が払われたのはメロンの栽培で、あらゆるガーデニングの本はその栽培法について書いているが、大きな成功を収めたとは言えないようである。メロンは通常、胡椒と塩で食べられた。メロン、すなわち pompons にはカボチャ pumpkins およびビョウタンの全種類が含まれている。これらのものは、特に比較的に貧困層の人々がいろいろに料理して食べた。野菜は当時、現代に見られるのと同じような価値をまったく持っておらず、今ではほとんど栽培されないムカゴニンジンのようなものが主役で、そのほかのものは大事にされなかった。豆類は比較的貧困な層により依然として広く栽培された。

庭師に、果樹園の目的は、と聞けば、どの庭師も果物の十分な供給を確保することと答えることは間違いない。しかしローソンは「果樹園の主要な目的は天職たる仕事に疲れた人にとっての心からの喜びである」と言う。果樹園の位置は、可能な場合には北東側が選ばれた。その考え方は果樹の木々の影によってフラワーガーデンの比較的か弱い植物を守ろうとしたのである。

リンゴの品数は「無限」であり、当時栽培されていたすべての品種の名前を述べることは不可能だと言われた。どのようなリンゴが最もよく知られかつ人気があったかは、当時の様々な文献から手軽に集めることができる。たとえば、シェークスピアの『ヘンリー 4 世 第 2 部』の中には「ピピンリンゴ、ヒメウイキョウの種、堅皮リンゴ」[小田島雄志訳]とある。料理用のリンゴは焼かれたり、炙られたり、そのほかいろいろ調理され、最上等の品種が今と同じように食事の最後にデザートとして出された。リンゴ酒は依然として大量に作られており、最大規模の果樹園はリンゴ酒用リンゴのものであった。リンゴの柔らかい果肉と豚の脂そしてバラ香水から化粧クリームが作られ、店ではポマードと呼ばれた。

マルメロは今ではほとんど完全に無視されているが、当時は大変に注目されていた。梨の品種の多さときたらリンゴよりもさらにもっと多かった。ジェラードは「60 種類もの梨を栽培している」人間を知っていると書いた。

果物栽培の改良、とくにサクランボの改良が進められたのはユグノー教徒の影響と言えよう。また、この頃から人気が高まりつつあったホップ栽培の進展もこれらの外国人のおかげと考えられよう。

アプリコットは既に見てきたように、チューダー朝時代にこの国にもたらされ、イングランド全土にわたり多くの庭園で栽培された。このほか、桃、ネクタリン、カラント、ラズベリーも栽培され、ミズキ類の木 cornel tree あるいはセイヨウサンシュユ Cornelian Cherry (*Cornus mas*) はこの頃もたらされ、果樹園の中で、パーベリー [ヘビノボラズ]、サービスベリー [ザイフリボク] service berry、アーモンドの木と並んで居場所を見つけた。

多くの大規模な庭園にはブドウ畑が一緒に作られていた。ただし、ワイン文化はイングランドではまったく復活することではなく、ブドウ畑は段々と栽培されなくなった。



図2 パーリー邸のオレンジコート  
パーリーの絵画より



この時期の著作を見ると、か弱い植物を保護し守るためのアイデアが書かれていることに気がつく。これは少し経つとオレンジリー [オレンジの温室栽培室] や温室 green house へと発展し、最終的には暖房温室 hothouse and stove へと発展した。オレンジは少数ながらこの国においても栽培するのに成功した。レモン栽培の実験は、バーリー卿 [ウィリアム・セシル エリザベス女王の重臣] によって試みられた。木がどのように調達されたかの歴史が書き残されている興味深い手紙が現存している。

ジェームズ 1 世は絹の産業振興の観点から、クワの栽培を推進しようと試みた。クワの木だけがまとまって植えられている姿はイングランドの多くの地域の庭園に広く見られるが、これはクワの木を人々に知ってもらうための努力が行われている時に植えられたことによるものであろう。

イグサ (*Juncus* の様々な品種) を床に敷く習慣は中世においては極めて一般的なことであった。ヘンリー 8 世の治世になり単にイグサを敷くことだけでなく、甘い香りのハーブや花が付け加えられた。エリザベス女王は、床に敷き詰めるための花が常に用意されていることを大変好んだ。植物は家の中でも育てられ、栽培するのに一番適した植物に関して、水のやり方、空気と光の与え方について書かれている。家庭の装飾のために花を育てるといふこの大きな喜びは、この時代のイングランドの生活の際立った特徴となった。

## 第 8 章 エリザベス朝時代の庭園に関する文献

ヘンリー 8 世の時代、大陸では植物学に関する科学の大きな飛躍が成し遂げられつつあった。イタリア北東部のパドヴァでは 1545 年に植物園が創設され、その後すぐにピザにも一つ作られた。しかし、イングランドの植物園が作られるのは 1 世紀近く後になってからのことであった。わが国以外のヨーロッパでは植物学の文献についても私たちよりも進んでいた。『健康の庭園』*Ortus Sanitatus* [著者不詳] は 1485 年に出版され、これに続くすべての植物学の仕事の基礎となった。メイサーの『植物誌』*Herbal* の翻訳は 1530 年頃に出版されたが、最初にして本当のイングランドの植物誌はウィリアム・ターナーに負っている。初期の植物学を研究することで、庭園の歴史に横から光が当たり多くの知識を

得ることができる。特にターナーは植物学だけではなくガーデニングについても大きな仕事をした。

トーマス・タッサーが『農業で成功する 100 の要点』*One hundred Pointes of Good Husbandrie* という詩を書いたのは 1557 年のことであり、1573 年には『農業で成功する 500 の要点』*Five Hundred Pointes of Good Husbandrie* を出版した。各月ごとに書かれた農業の要点の中にガーデニングについても触れ、詩の中で庭園栽培のために役立つヒントを与えてくれた。

この時代の植物学の歴史はやや入り組んでいるが、それはあまりにも一つの本から別の本へと過度に引用がなされ、同じ図版がいくつもの本に使われたりしたからである。特にディオスコリデスとカリヤメラは広く引用された。もう一人の 16 世紀の偉大な植物学者であるドドエンスは 1554 年に『植物の歴史』*A History of Plants* を出版し、さらに 30 巻からなる新しい著作『植物図譜六部』*Stirpium Historiae, Pemptades sex* として集大成を図った。

ジェラードの『植物誌』*Herbal* (1597 年) は、端から端までドドエンスの著作に拠っており、その一部は翻訳そのものであった。ローベルとギャレットの両人は、この植物誌



図3 ローベル ハクニーTyssen図書館所蔵版画より

のラテン語の誤りを直す手伝いをした。ローベル自身は『植物に関する覚書』*Stirpium Adversaria*（1570年）の著者である。ローベルは1538年リールの生まれで、イングランドへと渡り、「国王の植物学者」（ジェームズ1世）の地位を占めた。科学的な分類の最初の兆しが彼の業績の中には見られ、学識者からは高く評価されていたが、ラテン語で書かれ一度も翻訳されることがなかったので、英語で書かれた同時代のジェラードのように人気を博すことはできなかった。

ジョン・ジェラードは医師で「薬草」の専門家であるだけでなく、実践的な庭師であり、自分自身の薬草園を栽培していた。彼の『植物誌』はオリジナルなものと言い張ることはできなかったとは言え、翻訳者、翻案者としては、独自の業績と言える不滅の足跡を残した。昔の植物学者たちが互いに手紙をやりとりし、助け合った姿を知ると爽やかな気分になる。



図4 ジェラード 著書『植物誌』扉のページより 1597年

トーマス・ジョンソンはジェラード以上に他の植物学者、医者と協調して仕事をし、希少な花を探すために一緒に探検旅行に出かけた。彼自身はロンドンの薬屋であり、彼のスノウヒルの店こそ、イングランドで最初にバ



図5 パーキンソン 著書『楽園』扉のページより

ナナが並べられたところである。

パーキンソンは1567年生まれ、既に登場したすべての植物学者と同様に薬屋であった。彼は「ジェームズ国王の薬剤師」であり、チャールズ1世〔在位1625～49年〕により「王室首席植物学者」に任命された。パーキンソンの『日のある楽園、地上の楽園』*Paradisi in sole Paradisus terrestris*は当時最も人気のあったガーデニングの本であった。

ジェームズ1世とチャールズ1世の時代の最も多忙な研究者、収集家は3世代にわたるトラDESCANT一家であった。彼らが持ち帰ってきた植物の中には、ユリノキ tulip-tree があり、また彼らの名前を付したトラDESCANTのラッパスイセン *Plenissimus*、トラDESCANTのアスターがある。

ヒュー・プラットは、土壌と肥料に関し、当時最も学識の深かった人物と言える。注目すべき彼のガーデニングに関する業績は『花のパラダイス』*The Paradise of Flora*（1600年）とこれに第2部を付け加えて出版された『エデンの園』*The Garden of Eden*（1660年）である。



## 第9章 17世紀

この時代は3つに区分される。まずチャールズ1世の治世、2番目に共和国時代〔清教徒革命によりチャールズ1世が処刑された後〕、3番目に王政復古の時代である。この3つの時代におけるガーデニングの発展を見るとそれぞれが際立った特徴を持っている。園芸におけるゆったりとした進歩の潮流は穏やかに流れたが、庭園のデザインは第3番目の時代まで大きくは変化しなかった。共和国の時代には果樹園と市場園芸 market gardens の改善に向けての動きが見られ、チャールズ2世の治世下〔在位1660～85年〕ではガーデニングのあらゆる分野で大いなる先祖返りが目撃された。17世紀半ばまでにはガーデニングは著しく進化したのでエリザベス朝の初期は原始的な園芸の時代と言っても差支えないと顧みられるようになった。

ハートリブは農業の発展に大いに寄与した。彼の書いた『農業の遺産』*Legacy of Husbandry* は、多分クレシー・ダイモックたちによる農業に関する書簡を集めたものであり、彼らは種苗園や果樹園の数を増やすことが大事であると考え、ガーデニングは適切に運営されれば十分採算に合うことを主な根拠として議論を展開した。これらの人たちが途を開き、他の農学者たちがその著作の中で産業としての市場型ガーデニング market-gardening に刺激を与えようと試みた。

共和国の時代には、ガーデニングはより実的な点から取り扱われた。何を栽培したら一番儲かるか、が考えられた。そしてどうしたら土壌を一番改良できるか、そしてより収穫が上がるであろうかと。設置された庭園は多くはなく、また既存の庭園は戦争中に被害に遭い、特に王室庭園はひどい目に遭った。この中間の時期における進歩というものは、経済的な植物の栽培については見られたが、庭園のデザインとかフラワーガーデンについては進歩は見られなかった。植物に関する古くからの多くの迷信について、オースティンは、たとえば桃とかアーモンドの種に字を書いてそれを植えるとその木の熟した果実と同じ字が現れるのを待つというような話を「間違い発見」と書いた。このような間違いを論破する必要があったということは、とりもなおさず多くの庭仕事をやる人たちの考えというのが、まだどれほど未熟であったかを示すものである。

容赦のない人間の手によりイングランドの古い庭園が破壊され、これは時の流れ、季節の移り変わりによる変化よりもはるかに大きかった。「王侯らしい」庭園というものは、17世紀中頃には一つも造られなかったが、多くの古い荘園領主の館の庭園がこの頃から造られることになった。本書は「庭園」の歴史の本ではないから、いくつかの典型的な事例を紹介することにより、各世紀ごとの流行や計画の説明に役立てることで満足するしかない。一例として、ハンスタントン所在の庭園の一部は、ほとんど手が加えられておらず、また家計簿によりこのような庭園の管理方法について垣間見ることができる。



図6 ハンスタントン

王党派でガーデニングの偉大なパトロンの一として知られるカペル卿は、カシオベリに庭園を造り、それは17世紀で一番美しい庭園の一つにしばしば数えられている。彼の弟であるヘンリー・カペルも造園家であり、彼の庭園にはイングランドで栽培されている中で最上等の果樹が植えられていた。

もう一人の著名な王党派の造園家はジョン・イーヴリンである。彼の森林の樹木に関する偉大な著作は、狩猟場、森、森林地帯に植林する時の実的な参考になることを念頭に置いており、庭園という狭い範囲を大きく超えるものであった。ただ、庭園についても、たとえば生垣について月桂樹、セイヨウヒイラギのことを称賛している。イーヴリンは『造園家年鑑』*Kalendarium Hortense* すなわち *Gardeners' Almanac* を発行し、これは大人気のため改訂が重ねられた。そこには植えなくてはいけない花やするべき仕事が毎月ごと

に丁寧に書かれており、また花の寒さに対する弱さの比較表も作られ、花が3つに分類されている。

ジョン・レイ Rea の『花の女神フロラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』には庭園のおおよその大きさが書かれている。貴族の庭園は 80 平方ヤード [約 64m<sup>2</sup>] の果樹園と 30 平方ヤードのフラワーガーデン、一般の紳士階級は 40 平方ヤードの果樹園と 20 平方ヤードのフラワーガーデンで十分とされた。レイの描写によると、球根、なかんずくチューリップの球根の栽培について、一般の小さな庭園においてどれだけ大きな注意が払われたかがわかる。アウグスブルクで初めて (1559 年) チューリップがお目見えして 50 年経って、その花はドイツ、オランダ、イングランドにおいてよく知られ、そして広く栽培された。およそ 7 つのはっきり異なった種類のものが栽培され、そこから際限なく新しい種類が増え続け、新しい色を求める熱狂は造園家たちを夢中にさせた。

今日では、展示会など多くのことが花の改良を推奨するために行われていることから、改良のための努力が昔、自発的に行われていたことを認識することは難しい。ノリッジの人々は美しい花の栽培、生産に昔から優れており、その当時 (1660 年頃) 花屋さんたちが毎年祭りを開催し、一等賞の花に賞金を贈呈したと言われている。

外国のか弱い植物を持ち込んだことで温室 conservatories、暖房温室 hothouses が徐々に発展することにつながった。今やオレンジを育てることに注意が向けられ、これらの樹木を保護するために建てられたハウスは、温室の一番の先駆けと言えるものである。オレンジは鉢植えにされ、夏の数カ月外に持ち出されて庭園を彩ったが、「間もなく温室の中に収容」された。庭園は「選び抜かれた緑のコレクション」なしには庭園とは言えなくなった。王政復古の後、温室はさらに一般化し、「か弱い植物」を受け入れるためにオックスフォードの植物園にハウスが建てられ、後にチェルシー薬草園にも建てられた。造園家たちは一定量の空気が植物の生存のために必要であるということは理解していたようだが、光の力についてはまったく気がついていなかったように思える。

ル・ノートル Le Nôtre [André-, 1613 ~ 1700 年 フランスの造園家 ヴェルサイユ宮殿などを設計] がチャール

ズ 2 世によりイングランドに招かれ、彼のデザインと監督のもと、セントジェームズパークが造成され、同様にハンプトンコートとホワイトホールの改良も行われたと広く信じられている。このようにしてイングランドではフランスの影響を強く受け、貴族が所有する最も大きな邸宅の豪華な庭園は、古い様式の荘園領主の館の庭園とは違い、フランス風に設計されたのである。王政復古になると、ヴェルサイユの絢爛豪華を見たばかりのチャールズ 2 世が新鮮な気分で帰って来て、多分レイ 14 世の壮大さと競うつもりだったのであろう、多額の支出を行った。

この時代のどの庭園にも明らかに見られた一つの特徴はボウリング用グリーンで、100 年前から流行になっていた。また、どのような小さな町でも、宿屋の多くに付属して、誰でもが使えるパブリックのボウリング用グリーンがあった。これらの見事な芝生の区画は庭園の美しさをいやが上にも増大させたに違いなく、また小さな町では公開庭園 a public garden として、またレクリエーションの場所として活躍したに違いない。

本書は植物学の進化の歴史を扱うものではないが、リチャード・パルトニーにより、科学がこんなにも密接にガーデニングと結びついていたことが年代順に正確に示された。植物の体系的な分類方法の分野での 2 人の偉大なパイオニアはジョン・レイ Ray とロバート・モリソンである。二人とも同じ時期に分類体系を作り始めていた。単子葉植物と双子葉植物を最初に区別したのはレイであり、現在の「自然分類体系」Natural System の基礎を築いた。モリソンはオックスフォードの植物学の教授に任命され、『植物の歴史』*Historia Plantarum Oxoniensis* の著述に精魂を傾けた。これらの分類体系は、東から西から、旧世界から新世界から、植物が年を追うごとに数を増やして流れ込んできて、これらの宝物の分類の必要性が植物学者の最優先の仕事で、それが一番必要とされた時に登場したのであった。

■全訳版 (仮訳) の公開について

『イングランドにおけるガーデニングの歴史』の全文について、その仮訳を順次、都市緑化機構 HP にて公開中です。なお、第 9 章までの人名索引を添付しましたのであわせてご参照ください。  
<URL> <https://urbangreen.or.jp/gardeninginengland>  
都市緑化技術 編集部

